

広報伊達 151

発行日 令和7年7月18日

発行者 伊達地区小学校長会
会長 五十嵐 修

編集 同 広報部

《 巻 頭 言 》

ねこじゃらしの思い出

伊達地区小学校長会会長
五十嵐 修
(伊達市立上保原小学校長)

役職定年を迎える年齢となった今年度、久しぶりにメガネを作り直しました。歳を取ってレンズが合わなくなり見えづらくなってきたのです（特に近くの文字）。経験は重ねましたが、日々の出来事に振り回され「校長としての仕事をしっかりやれているのか？」と自問する毎日です。「そもそも教員としてしっかりできているのか？」と考えることもあります。この年になっても反省することばかりで、反省会の回数が増えています。

私が、管理職として、教員として、反省したと同時に子どもを信じることの大切さを感じた出来事がありました。ある学校に勤務したときのこと。とても親しみのあるS君がいました。校長である私にも気兼ねなく話しかけてくれ、とても楽しい子でした。反面、少し粗暴なところがあり、気を付けて見ていかなくてはならない一面もありました。ある日、清掃開始5分前になってものんびり歩いているS君を見かけ「間に合うように移動しなさい。」と声をかけました。「はい。」という返事がくると思いきや「間に合うよ！」という強めの言葉が返ってきました。「頑張ってるね。」と返してやればいいものを、私は少し頭にきたものですから「後で見に行くからな。」と言いました。数分後、S君の清掃担当場所に行きました。笑みを浮かべ無駄話をしながら清掃をしている（ように見えた）S君の姿がありました。私はますます頭にきて大きい声で注意しました。S君はきょとんとした様子でした。そこで、はっと我に返り、これ以上関わってはいけないと思い「きちんとやりなさい。」と言い残してその場を去りました。今振り返ると、子どものことを信じることができず、この

ような言動になったのだなあと思います。それ以降、声をかけづらくなってしまいました。彼が何を思っていたかは分かりませんが、進んで話しかけてくれることはなくなりました。私も、忙しさに紛れて、日々が過ぎていきました。そんなある日の朝。いつものように登校指導をしている私のところに、S君のいる集団登校の班がやってきました。「おはようございます。」とあいさつを交わし、登校の列が通り過ぎていこうとしました。次の瞬間、S君は私に向かって「はい。」と何かを投げたよこしました。ねこじゃらしです。私の手におつかって道路に落ちました。私は、その時、胸につかえていた物がとれたような、心の中の霧が一気に晴れたような感覚になりました。私は、ねこじゃらしを慌てて拾い上げ、「どうもありがとう！今日も頑張ろう！」と声をかけました。私には、S君がにっこりと笑ったように見えました。彼との心をつなぎ直してくれたねこじゃらしでした。私とS君の関係は、彼からのアプローチで元に戻りました。教師が指導するという気持ちはもちろん大切ですが、子どもを信じるという心を持ち続けたいと改めて思いました。その時のねこじゃらしは、転勤の際にもらった手紙と共に今も大切にとってあります。ねこじゃらしを見る度に、子どもを信じる心を思い起こします。

新しいメガネにはまだ慣れず、よく見えることもありますが、見えにくい部分もあります。子どもたちを見るときも一緒だと思います。どんなときも心のメガネで子どもたちを見つめ、子どもを信じながら日々関わっていきたいと思います。

《 提 言 》



子どもの時間？教師の時間？

桑折町教育委員会教育長 佐藤 浩 哉

私が新採用教員の時、研究授業を5回行った。その時、必ずタイムキーパーの役割を担う先輩教師がいた。事後研究会で、私が、発した言葉一つ一つが吟味された。そして、私が話した時間の長さについて知らされた。こんなに長い時間を使って話していたのか。もっと簡単に説明できたであろうことを何度も、しかも難しく説明している。それを思い知らされ悔しく、子どもたちに申し訳なく思った。

今、県教委は「授業中の先生の話の短くしましょう」と声を上げている。今更と思われるが、実はこれをするためには、深い教材研究が必要となる。長く話すのは教材研究不足のせいと私は捉えている。

教材研究をしたら、資料が豊富になって説明のために話すことが増えるのでは？話も長くなるのでは？と思う教師がいるかもしれないが、私はそうではないと思う。資料を集めてからが本来の教材研究である。多くの資料の中から、どの資料をどの順番で提示したり、説明したりするのか、また、授業によっては、子どもたちの考えを引き出すために活用する資料も決めなければならない。資料の選択、活用や提示の順序の吟味をしなければ授業で使える教材とならないからである。

そして、最も大事な教材研究が、その後に行っている。それは、説明する言葉の吟味である。調べまとめた説明内容の全てを教師が子どもに説明するのは、避けなければならない。印象に残り、理解が深まり、気づきを与え、定着する説明や提示の在り方を考えなければならない。教科の本質に関わる重要な部分の説明や興味・関心を引き出す展開のための説明・発問をどのようにすればよいのかなども考えることになる。特別活動、総合的な学習の時間や特別の教科道徳の時間などでは、

クライマックスの設定や探究的な学習のため、さらに、あえて子どもたちの心を揺るがす場面のための指示や発問の言葉なども吟味しなければならない。現在は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のための授業構成のための指示語句や助言のあり方などの吟味も必要である。

残念なことに、授業中にこんなことを感じている子どもたちがいる。「先生は、教科書に書いてある分かりきったことやメッセージ性のない説明を話し続けている。」「あの先生は、授業の残り時間が何分あるのか知っているのだろうか？」さらには「じっと黙っていなければならない時間を過ごしている自分たちのことをどう考えているのだろうか？」と。申し訳ない気持ちになる。

教師と子どもとの信頼関係は、そのほとんどが子どもたちとの交流から生まれるとすれば、その交流のほとんどの時間は授業であり、信頼関係が深まるのは授業であると言える。その授業で子どもたちがどのような状態でどのような気持ちで教師の話（説明や発問、指示や提示）を聞いているかを考えることは、教師としてそれまでの授業から、そして授業中の様子から適時判断しなければならない。

子どもが授業中に先生からの指導や解説を望んでいる時間は、授業時間の30%程度らしいことや、ある国では、授業時間の20%を教師の発話の時間として、80%は子どもたちの対話や探究の時間として設定することを目標としていると文科省行政説明で聞いた。

私たちは自分が子どもの時の感覚を忘れがちである。今一度、子どもの気持ち、状態をしっかりと見つめて、子どもが待っている言葉だけを伝え、あとは子どもを信じて、主体的・対話的で深い学びの時間となる授業づくりに挑みたい。

《 新 会 員 よ り 》

家庭、地域とともに

伊達市立大田小学校長 芳賀沼 真由美



本校は、明治5年9月に金原田村に開校した典学義塾がはじまりで、今年度創立153年を迎えます。この歴史と伝統のある大田小学校に校長として勤務できることを大変嬉しく思うとともに、

職責の重さを実感しています。

本校では、生活科や総合的な学習の時間などに地域の方を講師としてご指導いただいたり、年2回の地域交流活動で地域の方と一緒に花の苗を植えたりするなど、地域の方からご支援・ご協力い

ただきながら、交流を深めています。また、地域のいちご農家での収穫体験やきゅうり農家などでの見学を通して、子どもたちは地域のすばらしさや地域の方の温かさを知ることができています。

これまで、家庭や地域の方に温かく見守られ、大切に育てられてきた子どもたち。この明るく元気な103名の子どもたちの笑顔をさらに輝かせるために何ができるかを考えながら、学校と家庭、地域が連携・協働した学校づくりを進めていきたいと思ひます。

校長会の皆様、よろしくお願ひいたします。

誰もが協力し合い学び合う楽しい学校を目指して

伊達市立柱沢小学校長 佐藤 実



本校は、紅屋峠と呼ばれる高台にあり、校庭北側から伊達平野や蔵王を一望に見渡すことができます。春の桜の季節には、峠いっぱい1000本以上の桜が咲き誇ります。一面に咲く美しい千本桜が見渡せる本校の校庭は、子どもたちにとっても学校の誇りともいえるものです。

このように素晴らしい環境のもと、柱沢小学校の子どもたちは、日常的に縦割り活動を通して上級生が下級生を思いやり優しく手を差しのべながら、学年の枠を超えて協力しています。このような姿は本

校児童の強みともいえる姿と感じています。

本校は小規模校でありながら、特別支援学級2クラスを設置しているという特徴も持ち合わせています。互いを思いやり協力しあう本校の子どもたちのよさを生かしながら、本校ならではの、ユニバーサルデザイン視点を取り入れた授業づくり、全職員による校内支援体制を一層推し進め、本校の目指す学校像「誰もが協力し合い、学び合える明るく楽しい学校」の実現に向け、学校経営を進めてまいりたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

地域とともにある国見小学校

国見町立国見小学校長 五十嵐 隆之



本校は、平成24年に小坂小学校、藤田小学校、森江野小学校、大木戸小学校、大枝小学校の5校が統合されて開校しました。それぞれ歴史ある学校が一つになり、新しい歴史を刻んでいます。

また、国見町では、保育所・幼稚園・小学校・中学校を合わせて国見学園と称し、コミュニティ・スクールを基盤に、地域とともにある学校づくりを推進しています。地域の方々には、書写指導・裁縫指導・読み聞かせなどの学習支援、野菜栽培・果樹栽培・稲作などの体験活動支援、笹巻きやあんぱ柿づくり・しめ縄づくり・太々神楽体験・町歴史探検などの郷土学習支援に携わってくださり、地域で子どもたちを育てていただいております。さらに、地域学校協働活動として、公営塾や長期休業学習会による学習支援、放課後子ども教室などが実施され、放課後や休日においても、子どもたちの成長を支えていただいております。

町に一つの小学校の校長として、町の未来を創造する子どもたちの教育を担う責任を胸に勇往邁進していく所存です。よろしくお願ひいたします。

《 特 別 寄 稿 》

学 校 経 営

伊達市立梁川中学校長 板 橋 竜 男

校長に昇任して13年目であるが、学校経営といっても、私自身明確な答えはない。教員としても、教頭としても学校経営に参画しているので、強いてあげれば、いかにして教職員全員の力で教育活動を行い、児童生徒を伸ばしていくかにあると思う。

そのため、学校の教育活動を円滑に進めるためには、はっきりとした方針で、わかりやすい内容で、全員で行うことができればよい。しかし、職員会議でもそうだが、校長が何かを話して、そのまま動くほど、物事は単純ではない。教職員は年齢も、経験値も、メタ認知も違うのである。今、中学校で問題となっている部活動の地域移行を考えても、部活動を行っている時間には、よい授業を行うために教材研究をすべきである、いや、部活動は人間形成上、大事な教育活動である…どちらも正しい意見であるが、どちらかに舵を切らなければならないのが校長の役目である。

そのためにも、この会議や打合せでは、何を目的とするのかを確認して臨まなければならない。前出のような、どちらをとっても正論である場合、反対意見、異なる意見、それをすべて吐き出させ、いわゆるガス抜きを行うことを目的とするのか、結論は出さないができるだけ多くの意見を話させ、なんとなくの方向性を示唆するのか…そこがぶれると方向性が定まらないどころか、不協和音だけが残ることになり、教育活動に影響が出てしまう。

また、どちらかに舵を切らなければならないとき、法的にはどうなのか、今の教育界ではどうなのか、そして一番には自分の学校、児童生徒や教職員、保護者や地域的にはどうなのか…その分析と意思をわかりやすく表現しなくてはならない。この方向で全員が進める…多少は反対があるだろうが、そのためのゆるぎない意思と考えを熟慮してもっていたい。

今、本校では生徒指導、学力向上が課題となっ

ている。特に生徒指導では、特別支援教育など、聞く、話すなどの4技能の資質・能力が不十分な生徒に、いかに落ち着きをもって授業に臨めるかが課題となっている。以前より教室に入ることができているものの、一人一人の学びが成立しているとは言いがたい。また、普通学級の生徒でも、日々の学びから逃げている者が少なくない。他にも特別支援学級では粗暴な行動が目立つ子もいる。

このような課題について、保護者から心配の声が上がったり、苦情も出てきている。当然教育委員会へも連絡が行く。校長として、このようなクレームは耳が痛いところであるが、今の自分たちの考えや活動に対して客観的に診ることのできる材料としてとらえている。こんなときの整理法として、鉄は熱いうちに打て（今すぐやらなければならないことは何か）と、急がば回れ（長期的な展望で進めることは何か）にわけて考え、指示伝達事項として伝えている。

今回の件ですぐにやることは、問題行動への速やかな対応のためのケース会議で、今後の指導方針を決めて全員で進めることにある。校長としての意見は先に話す、そして先生方の意見と合わせる。校長からの意見がなければ先生方も動きにくい。長期的な展望としては、学校の居場所づくりやわかる・できる学習のための授業改善や道徳や特活など教育活動全体での進め方になる。これは、校長としての今までの経験や知識や考え方がものを言うところである。

いろいろと書かせてもらったが、自分自身、毎回、自信を持って学校経営を行っているわけではない。かなり悩んだり、迷ったりするところもある。そんなとき、校長会などで相談したり、情報交換したりして、柔軟に対応している。ぜひ、この校長会で、お互いの学校経営について語れば幸いである。

編集後記

伊達地区小学校長会広報151号をお届けできましたこと、心より感謝申し上げます。今年度も桑折町教育委員会教育長 佐藤浩哉様、伊達市立梁川中学校長 板橋竜男様、そして3名の校長先生方には、お忙しい中、温かいご寄稿を賜り、誠にありがとうございました。

今後も、子どもたちの豊かな学びと健やかな成長のため、そして教職員が生き生きと働ける環境づくりのため、「伊達はひとつ」の精神で、心を一つにして教育活動の充実に邁進してまいりましょう。